

Shiripaの星

[シリパのほし]

北星学園余市高等学校同窓会誌



ラーメン麵蔵(めんぞう)チエーン オーナーは2期生でした!



年商14億円、

道内にラーメン店29店舗、井当屋さんと食堂も経営する(株)ヨシクラのオーナー佐々木実さん(51)が、倶知安町出身の北星余市2期生(1年担任山岸

先生、2・3年担任伊藤先生)と聞き、早速札幌の本店に佐々木さんを訪ねたところ、なんと奥さんは在学当時から交際していた1期生旧姓鈴木啓子さんとわかり、啓子さんも会社の役員として事業に携わっていることから、同席してもらい一緒にお話を伺いました。

佐々木さんは北星余市卒業後サラリーマン、レストラン経営、トレーラー運転手等様々な仕事に挑戦し、啓子さんと共に山有り谷有りの人生を乗り越え、9年程前、独自の味噌ラーメンを考案、郊外型ラーメン店をオープンしたところ行列が出来るほどの人気となり、3年程度で現在の会社の基盤を築き上げたそうです。ここだけ紹介すると、成功美談のような話となってしまうのですが、飲まず食わずで借金返済に追われる日々が続いていた中、急に大きなお金を手にしたこと、相当無駄遣いをした時期もあり、人には言えない苦労もかなりあったようです。

在学当時の話を伺うと、自称「生意気な悪(ワル)」と言うように、謹慎、サボリ等は常連、当時の先生達もかなり手を焼いた生徒の一人のようでした。そんな高校生活の中で転機となったのは2年生の時、伊藤先生に出会ったことだそうです。どちらかと言うと日陰の存在であった佐々木さんは、伊藤先生に3年生を送る会の演劇を任せられ、「人前で話すこと」や「やれば出来る」精神を叩き込まれ、今でもその時のセリフはしっかりと覚えているし、その時のことが現在に繋がっていて、伊藤先生とは今も親交を持ち、家族ぐるみのお付き合いを続けているそうです。最後にこれからの抱負を伺ったところ、「どちらかと言うと若い人を採用することが多く、自分もあまり真つ当ではなかったのですが自分の経験を生かし、人間教育、人材育成に努めながら、お客様には低価格で美味しい商品を提供し続けたい。」と語ってくれました。別れ際「同窓会事業で何かお手伝い出来ることがあれば相談してください」と力強い言葉を頂き勇気づけられ取材を終えました。札幌市厚別区在住、奥さんの啓子さんと娘さんの3人家族、笑顔がとても素敵な先輩でした。

佐々木君は背が高く、スリムで笑顔の絶えない生徒でした。当時の学園祭の仮装行列は余市の名物でした。学校から余市駅までの往復で、かなりの強行軍でした。そっだ、十字架に磔りつけられたイエス様の役をしたのが実君で、みんなが休憩しても磔りつけられたままでいたんですよ。「俺、最後まで磔りつけられたままでいたからね」と誇らしげに言うって、倶知安に帰って行つたっけ。忍耐強かつたんですね。

私は27歳で北星に就職し、同時に2学年の担任を持ちました。その後、59歳で退職するまで7回卒業生を送り出しましたが、最初の教え子は特に印象が深いですね。今でも出席簿なしで赤木、岩井、上野とスラスラ出てくるんですよ。

「晩成に勝る早稲はなし」と、よくいわれませんが、ふりかえってみると当時の生徒は晩成型が多かつた、つくづく思います。実君夫妻から、私の退職記念にバリ島旅行をプレゼントされるとは、夢にも思いませんでしたよ。



講師 伊藤 英博



S H I R I P A は 今

北星学園余市高校校歌

作詩 北垣俊一
作曲 川越 守

一、うるわしき海 はるかなシリバ
われらが学舎ここにあり
真理を究めん若人の息吹き
ああ限りなく地にみちん
学へ青春の意気たからかに

二、輝く山なみ 豊かな大地
われらをはぐくみ育てゆく
自由と平和をこの地に受けつき
ああ雄々しく土に生きん
禁けわれらが母校のいしすえを

三、愛とまことを精神とし
時代をこえてながれる生命
人の世おもい歴史を創りなさん
ああたゆみなくいそしまん
仕えよ世界の隣人のために
仲間 友情 団結
われらが北星余市高

校歌が生まれた経緯

校歌の作詞者としてその名を北星余市高校に残させていたことは生涯にわたる喜びであります。創設から9年間、校歌がなくて修学旅行のバスでガイドさんから校歌をリクエストされて、代わりに讃美歌を歌ったということ

を聞いていました。創立10周年記念事業の一つとして「校歌制定」が企画されました。外部の人に頼まないで、校内で公募ということになりました。記憶の限りでは私の作詞とあと3編ぐらいあつたかとおもいます。選考委員会は選者を北星大学の矢口以文教授に依頼しました。ご自身詩人である方と伺っていました。その結果、私のものが北星余市高校校歌の作詞として選ばれました。うれしいことでした。後先私が詩を作ったのはこれ一つでした。作曲は当時北大交響楽団の指揮者をしておられ、ご自身チェロ奏者でもあつた川越守さんをお願いしました。川越さんは私の作詞を読まれて、北星余市高校は男子校ですかと聞かれた筈。川越さんは作詞の内容をよく理解されて大変立派な作曲をしてくださいました。発表会では、ご自身、チェロを演奏して全校生に新しく制定された校歌を披露されました。演奏を聞かれた卒業生の一人は北星の歴史にびつたりの校歌だと感激したことを話しておられました。

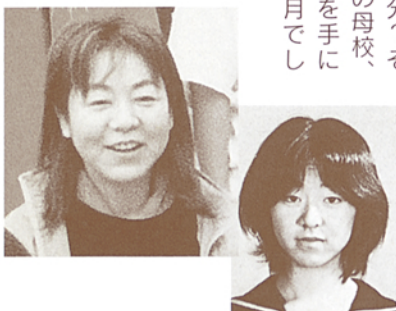


北垣 俊一

母校で働く仲間

8期生 北星学園余市高等学校 教諭 吉田美和子

公立高校の受験に失敗、親や中学校担任に説得されイヤイヤながらに潜った北星余市の門、この日から私の新しい人生がスタートしたと言っても言い過ぎではなからう。当時、余市町内では不良高校と名が知れ地元小学生や中学生から恐れられていた北星、「絶対に北星高校にだけは行きたくない、あの高校の制服だけは着たくない」と泣きながら訴えた私に親はこう言った。「北星高校の先生方はとても熱心に生徒に対応してくれるようだよ、イヤだったら、いつ辞めても良いから親の言っている事が嘘か実か自分の目で確かめてみたら?」の言葉に反響を示してしまった。気がつくとも1週間辞めて剣道部に転部予定が3日でバスケが好きになり1週間でバスケに狂いだし、その後は学校を休んでもクラブにだけは出るバスケバカに変身、学校大好き人間になっていました。今では笑い話というか自慢話というか、3年間で一度だけ2年生のスキー授業の日にクラブをサボって喫茶店でクリームゼンザいを食べて帰り顧問の武村先生にコッピドク焼きを入れられた日が懐かしいです。私はバスケに出会いバスケの魅力に取り付けられ、就職2年後(地元の銀行)退職、自分の夢に向かう決意を固め、北海道の体育短大に入学、運良く、卒業の年に北星余市から非常勤講師の話が持ち上がり晴れて4月より非常勤講師として勤務、念願の母校でのバスケ部顧問にもなり力が入る講師業十数年、人間これで十分と思える日はそう長く続かなくて上をみるとこれまた欲が倍増、結果私は自分の夢をまだ手に入れていないことが判明、15年間の講師業から新に専任教師になるため再度、3年間大学へ当時35歳?多分?そして今度こそ真正正銘の母校、北星余市高校専任教師を手に入れたのが7年前の4月でした。現在2度目の担任を持たせていただき力不足ながらも毎日若い生徒からエネルギーをもらい紛争し戯れて満足のいく日々を過ごさせていただいています。



学校を取りまく余市の自然、美しき海があり、おだやかな山並みがあり、リンゴやブドウなどを育む豊かな大地、26年間の私の北星での教師生活を育み、支えてくれました。その景観は今もお私の心の中に深く刻まれています。またキリスト教学校として同僚の教師たちと共に求め続けた北星教育の営み。自然と人とのつながりの中で神様は私に一つのうたごころを与えてくださったのだと思っています。

『仲間・友情・団結 我らが北星余市高』

この言葉が失われることなく北星余市の教育が継続、発展し続けることを願っています。

北垣先生 昭和46年 余市高に赴任

24期が最後の卒業生

1997・3 北星余市退職

新潟敬和学園

現在山形学院高校校長として奮闘中

自分と向き合えた北星余市

32期生 佐藤真希子

自分らしくいることが難しい。自分らしくいるには強さが必要だった。強くなりたくて、「自分」でありたくて、15歳の私が横浜から一人で旅立った日から7年。たくさんの魅力的な人達と出会い、時間を共有して、経験して、一人にな



北星での3年間、時間がたくさんあった。自分と向き合う時間がたくさんあった。自分

がどういう人間なのか、何を考えている人間なのか、自分自身というものを考えて、探していた。それは一人ではできなくて、美術の授業中こそり海に行つて友達と話し込んだ時間、先生と食事に行つてたわいもない話をした時間、テニスの試合で負けたこと、テニス部で海に行つてうに鍋したり、山に行つて葡萄狩りしたり、温泉行つたり、たくさんの要素が含まれている。北海道の小さな町の、4畳半の部屋で流れていたかけがえない時間。どんな時間も、すべてが愛しい。

北星余市高校を卒業して4年。この4年間、短大へ進み、地元の中学校へ教育実習に行つた。でも諦めきれなくて、大学へ編入して、4力月前には念願の母校北星余市高校での教育実習を終えた。教師になりたいと思つたのは、たくさん魅力的な先生に出会つたから。学校という場所の魅力をお腹いっぱい味わつたから。まだまだ私の道の先は見えないけど、私には意志がある。今度は教師として、学校の魅力を伝えていきたい。

北星教育の根幹を守つて

山 弘子

同窓生の皆さん、お元気ですか…。
3期生が3年生の時に、5期生と共に北星にやつて来て、以来33年間、北星に居座つている山弘子(旧姓佐藤)です。
私は今も、気持ちだけは元気いっぱい、現2年生(37期生)の担任をやらせてもらっています。親子以上も年齢の違う生徒を相手にして、魅力的な男子、女子に惚れられしながら日々を送っているところは、昔と少しも変わっておりません。

ただ、国語科の授業で、「ヒカリゴケ」を扱う気力が出なかつたり、「was bon」で熱く語れなかつたり、「平家」や「源氏」の古典ものの楽しさを引き出すのが面倒になつたりと、悲しい徴候は、確実に私を覆つて来ているようです。

今の生徒の心に響くものが、どんなものなのかを見究めるのに、感が鈍つているとも言えるでしょう。
それにしても、振り返つてみるたびに、私の人生の大半が、北星で埋めつくされて来たということ、つくづく知らされる今日このごろです。それは決して後悔の情を伴うものではなく、味濃くして善き人生かな、の思ひなのですが…。

この間、14期生を卒業させた頃に、天から授かつたような一人息子も、穏やかに育ち、現在大学2年生です。
卒業生たちに「父ちゃん」と慕われた夫はこの夏、軽い脳梗塞になりましたが、おかげで、1日60本のタバコを全く喫えなくなりました。その老母も健在で、私の北星生活を支えてくれています。

さて、北星余市は昨年から大麻問題で世間のパッシングを受け、大きな試験に立たされております。
しかし、考えてみれば、いつの時代にも、北星はその時代の抱えた病の渦中であつて、そこで悩み苦しむ若者、弱きものの側に立ち戦い続けて来た学校でした。

その意味では、大切なところ、踏んばりどころは、昔も今も変わつていないと私は思っています。教職員が小異を捨てて、一丸となり、北星余市の教育の根幹を守り貫くことに専念すれば良いのです。

同窓生の皆さんも、母校の将来を思うとハラハラすることがあるかもしれませんが、いつまでも見守つていて下さい。
皆様の御健康を祈りつつ、私も、37期生を卒業させるまでは澁刺としていたいとの一念で、がんばります。

2002年11月2日記



25年ぶりの仲間達

第10期生 葛西 利美



「オー、久しぶり、元氣か」「太ったなあー、髪の毛もなくなつて」と言つた声の間かされるなか、去る平成14年9月15日、小樽グランドホテルで30名の仲間と武村先生・戸先生で第10期生同窓会を開催しました。

今回、幹事をしましたが同窓会名簿により120名に案内状を出しました。残念ながら宛先不明で戻つてきたのが半分程ありましたが、案内状を受けた方から連絡をとつていただいたりして30名の仲間が集まりました。

くしくも、その何日前、学校での事件が発覚し「北星余市高校第10期生同窓会」の看板を前日に「武村先生・戸先生と集う会」に変更せざるをえませんでした。

武村先生の挨拶、戸先生の乾杯で宴会が始まり、テーブルを囲み昔話に花が咲いていました。

しかしながら、25年という月日は長いもので「お前誰だっけ」となるの人に「あの人の名前なんていつた」という声がかれ、そこで25年振りの自己紹介が始まりました。

一人ひとり始まつていくたび、回りからは歓声やら驚きの声が聞こえてきました。

又、青春時代の甘い一時の話しや苦い話もたくさん出ていました。

「私、あなたが好きだったのよ」とか「戸先生に殴られた」とか、高校時代の思い出話して盛り上がりました。

こんな時程、時間がたつのは早いものであつたと言つた2時間でしたが、当然全員参加の2次会へと場所を変え、本当に楽しい一時を過ごしました。

帰り際に「何かあつたら電話くれ」とそれぞれが口にし宴会をお開きとしました。

仲間・友情・団結は北星余市のモットーとしていてるところですが、この時程この言葉の持つ意味に感銘を受けたのは私一人だけでしょうか…。

来年もまた開催し、更に多くの仲間達に会えることを期待したいと思つています。

全国の同窓生のみなさんへ

学校長 佐々木成行



全国の同窓生のみなさん、日本経済の深刻な不安定さの中、お元気で活躍のことと思います。北星余市は今年度4月に、新入生の38期生を迎え全校生431名でスタートしました。

38年の時を刻んで、北星余市も誕生期に活躍された先生方が退職を迎え、職員室の顔ぶれにも変化が出てきています。今年3月に深谷先生、来年3月には山岸先生が退職されます。

さて、今では全国の学校として名を挙げていますが、この38年間の歴史は、生徒募集との闘いの年月でもありました。生徒なくして「教育の取り組み」もあり得ませんでした。北星余市は後志の過疎化に伴い、生徒募集のエリアを拡大していく道を進みました。6000名を超える同窓生を数えますが、生徒募集という視点で38年間を考えると、3つの時期に分ける事が出来ます。同窓生のみなさんの「振り返ればなつかしい青春時代」は、それぞれいつの時期に属するのでしょうか。

- ① 1期生～12期生（地元の後志の生徒が中心 1966名）
- ② 13期生～22期生（地元の後志に札幌の生徒が加わる 1535名）
- ③ 23期生～現在（転・編入制度導入で全国から募集 2580名）

社会の変化、出身地域の変化など子どもを取巻く環境の変化で、苦勞する課題にも変化が出て時代時代で格闘してきましたが、現場にいる教職員は昔と変わらず、「集団の中で人間は成長する」という考えのもとに、生徒と真正面から向き合っており、卒業をめざして一緒に取り組んでいます。

そして：10月、11月、12月と学校説明会で全国を回りながら、「北星余市の教育」の原点を再確認し、今年も39年目の生徒募集の闘いを進めています。

この時期、母なる余市川にはサケが遡上しています。今年後とも北星余市の教育を見守りご支援下さい。

「奨学金に助けられました」

同窓会の事業として開始した校内玄関ロビーでの自動販売機の設置は、順調に収益を上げています。今年度の奨学金（月額5000円）は2名の希望者へ支給しています。

この奨学金制度は北星余市高校に本校同窓会員の子どもが入学した場合に、就学を援助するものとして今年度の4月に創設したものです。役員会としては会員みなさんの子どもが北星余市に入学されることを希望しています。

不況・リストラの波は本校生の親の足もとへも押し寄せて来ています。今年は学年担任団から推薦された2年生と3年生各1名に同窓会奨学金（年額60000円）を支給しました。

保護者からも感謝のことが寄せられています。役員会も本人を励ましています。



同窓会活動

在校生への支援

- 奨学金・就学援助金
- 行事への援助
強歩遠足・学園祭・弁論大会・クラブ等（全道・全国）
- 卒業生への記念品（卒業証書用筒）
- 校内の自販機の管理運営
- 課外活動援助（バスケットボール）

卒業生名簿整理
同窓会会報発行



編集後記

手許に届く原稿やアルバムを眺めていると、時代の移り変わりと共に生徒も学校も、そして学校を取り巻く環境も大きく変化していることが良くわかります。でも変わらないものがあることを今年の編集作業の中で発見しました。

それは皆の「笑顔」です。アルバムの中の皆は本当に「いい顔」をしているのです。「北星余市」で共に生きた共通の思いの証に見えるのです…。気がつくと、ふと懐かしい校歌を口ずさんでいた…そんな感じで今年も「北星余市」を感じていただけると嬉しいです。（え）

「北星余市高校OBの掲示板開設」

10期生板谷幹男さんが同窓生の連絡用掲示板を開設してくれました。同窓会や同期会の開催や友人同士の連絡用等ご自由にお使い下さいとのこと。同窓会会としても是非活用させていただきます。

URL : <http://dengon.net/bbs/hokuseiyoiichi>

Shiripaの星 Vol.2 2002年12月1日発行

- 顧問 簀輪菊雄
- 編集長 松村 悦子（15期）
- 副編集長 松浦 一法（12期）
- 編集委員 安藤 栄子（1期）
本間美智子（5期）
馬場 希（12期）
平野満寿美（14期）

【発行】

北星学園余市高等学校同窓会「シリバの星」編集委員会
〒046-0003 余市郡余市町黒川町96番地
TEL (0135)23-2165 FAX (0135)22-6097
E-mail hokuseiy@netfarm.ne.jp